

季能古博物館だより



お正月を考えて少栗「鶴図」です。堂あり真人在り

あい偕に大齡を延ばす (少栗五十七歳の作)

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝 (十三) 庄野寿人

- ・ 鯨油の稲作虫害防除に福岡藩の鯨油購買と全農反別配給が藩施策となる
- ・ 昭陽・長州藩に益富捕鯨の進出を成功

文政九(一八二六)年元旦、昭陽は孔子聖像に抹茶を点て供えた。書きぞめのつもりで夏牋(画仙紙)半切に「君子萬年永錫祚胤」の八字を一行に書し、落款に「丙戌(当年の壬子)第一書正月朔旦に井華水(自家の井戸水)を以て揮毫」とした。鉄次郎(次男十九歳)また試筆を見せる。帰省しない入塾生七名が美事な蛤を年賀に差出す。きつと汐時(きつき)を見て勉強の合間に膝まで寒潮につかって、大ぶりの目をとっていたのである。

鉄次郎は年始廻り、西の坂本家、東の衣非氏(亀井家が所属する組頭)南の谷家、北は伊崎の山口白貴、同家は叔父(昭陽の義弟)ということもあって夜間に及んで帰る。

在塾生は午後、外来書生も呼び、みな眠りこけるまで飲む。昭陽も雷首を呼び夜を徹し寅の刻(翌夕方近く)まで通飲して寝込んだ。二日、雀のさえざりに起こされて

書齋を自ら掃く。蛤(かまど)と鯨(くじら)の雑煮(ぞうじ)を食す。鉄次郎、東の博多方面年賀に出る。坂牧順庵、泉六百の年賀を受く。文瑞、雲峰、慈山等酒三升持参年賀。これに洒する。三日、ひる前長婿(少栗婿をいう)、友と紅兒(少栗の一女、一年六九月)親子三人来る。昭陽も妻いちも大喜び。これに博多の生民(昭陽家の主治医)、姪浜の助次郎も加わる。雷首は、鮪を持参。一家近親のつどいでもあり、宴なごやかに賑やう。書生たちは朝から箱崎宮に行く。年賀は崇福寺と興徳寺(両寺とも臨濟禅宗。崇福寺は現に黒田藩主家の菩提寺。興徳寺は鎌倉期の九州探題北条氏の菩提寺であった)昭陽も飲み過ぎることなく良い正月になったようである。

少栗一行(三名)は泊る。紅兒は三日から六日まで昭陽宅に四泊する間に、すっかり百道の昭陽宅に馴染んでしまったようである。

写真 杉山謙

祖父昭陽、祖母伊智の可愛さも格別であらうが、書生たちの数も多く家も広くにぎやかさが違う。

今宿の少栗家と格段に居心地がよいわけである。

ついに紅児を父親の雷首が抱えて帰ろうとすると泣き出し、すぐ昭陽や伊智のところに助けを求めるように走りこんでくる。五泊した七日の日は昭陽から離れない始末となる。

昭陽は余の宝とするところなり、と笑っているだけである。

ついに今宿から乳母の牧(まき)を呼び寄せ、祖母伊智も一行に同行して今宿に帰した。

ようやく昭陽家の紅児さわぎ一段落。十一日には太宰府の少進(弟雲来の養子)が年賀と近況報告に来る。患家の診療も以前と変わらず塾生たちも減少していない様子で、昭陽も安心である。少進の妻帯が気になるが本人は別段に急ぐ気配はない。

昭陽が年末から宿題にしていた平戸・生月の益富駿太郎詩文稿と平戸藩士十名の詩巻添削を仕上げた。これに父親又左衛門依頼の大唐紙八枚の大字揮毫と駿太郎書四枚を畳屋(生月・益富家の家号)博多駐在番頭の生月帰店に託す。

◎生月島、益富家と亀井家のこと

安永八(七五)年三月、益富家二代又左衛門追善石碑を南冥の撰文により建立。(青島稿六頁)

(注)益富家は生月捕鯨の総宰配として代々、又左衛門を称し、又屋号を畳屋とする。

初代は松浦氏に仕え馬廻組となり、藩主により初姓山県を許され以後襲名して明治に至る。このため捕鯨業は弟の家業と、これまた明治に及ぶ。

亀井家との交際は、南冥の徂来学を又左衛門が以前から同好しており、また南冥医療を信頼、南冥以後は雷首が主治医となって年々数回の生月往診と滞在を勤めた。もし家人に患者が出た時は、容態の安定を見て福岡から弟子を呼び回復まで滞在させた。雷首の後任は博多の生民を担当させ、同家の主治医は亀井医を嗣ぐ

医療鍛練を選抜し益富家代々の保健に責任を持った。学術についても益富家の子弟代々は福岡亀井家に留学を家法として守り、これで子弟は揃って詩文に優れ塾中で立派な実績を残している。とくに五代又左衛門が鯨油製法に

精妙を得ると、福岡藩は稲作虫害に効用を認め、ついに福岡藩の鯨油納入を生月産鯨油に限定した。このため福岡藩は益富家に年扶持五十口を

与えたが、(青島稿六〇頁)益富家は辞退した。

益富家ほどの富豪でありながら、商用の場合は、すべて畳屋(たたまみ屋)の屋号で通す。西海はおろか全国一、二の大捕鯨業で各地の使用人従業員は四千人といわれながら、畳屋の屋号名はその由来を明らかにされず、語る者もない。

◎鯨油・稲虫害除去に特効

享保十七(七三)年「享保の大変」といわれる稲田の蝗害大発生あり。

この以前から筑前地方には蝗害の鯨油駆除法がいわれており、鯨油の入手ができれば相当の効果を実証者が示していた。但し、古油は水面のはしり悪く上油(新油)に限るとされた。

篤農家の宗像郡須恵村の古野家による「明和四亥年、田作大害虫。鯨油一反二付、三、四合宛二度サシ候へハ虫除ル、春御免、鯨油不入、村甚大痛也」。このため翌年から鯨油を害虫用に限り郡奉行より手当されることになった。この頃から福岡藩による「生月鯨油」の買込みが始まり、ついに藩の鯨油備蓄は施策になった。

天明六年には老反に付油三合を積鯨油式千五百四拾四挺。挺は但し四斗樽二斗とされ、福岡藩全十五郡の田三三、五二町歩に反当三合宛の

見積で四斗樽にして二、五一四挺を必要とした。

「生月油注文書」当西(寛政元)年買入分  
鯨油 四百四拾九石式斗

内  
九拾八石 但四斗入  
式百四拾五挺  
四拾貳石式斗 但式斗入  
式百拾壹挺

右二口遠賀郡芦屋町水揚  
四拾七石式斗 但四斗入  
百拾八挺

六拾八石式斗 但式斗入  
三百四拾壹挺  
右二口福岡永蔵下水揚  
八拾四石 但四斗入  
式百拾挺

(博多対馬小路那珂川尻)  
右壱口宗像郡津屋崎浦水揚  
四拾八石 但四斗入  
百貳拾挺

右壱口早良郡姪浜水揚  
六拾壹石六斗 但四斗入  
百五拾四挺  
右壱口志摩郡横浜浦水揚  
右油当三月限可被相納事以下略  
福岡永蔵下廻着  
郡代役所  
芦屋町廻着芦屋町

濱口屋正五郎  
角屋 源蔵

津屋崎浦廻着

津屋崎村庄屋  
貞吉

同村

長十郎  
市次郎

姪浜廻着

姪浜村庄屋  
弥平

横浜浦廻着

横浜浦庄屋  
助七

筑州

郡代役所 印

文政八年正月

益富又左衛門殿

右の外に鯨油四斗入大樽四百挺が博多石蔵屋に別扱い卸し物とし、また鯨肉の各製品も同店に卸販売された。後に博多の相物問屋・石蔵屋、由岐屋、五島屋三商人が豊屋の藩購入の鯨油について郡役所ほかの指示を得て農家鯨油の配給を担当した。

福岡藩は豊屋に五十人扶持（年給二五〇石に相当する）を給しようとしたが、これを又左衛門が断つたことは前稿にも書いた。理由は鯨油が鯨業に直接影響され、納入量、価格

等の保障ができないとしたのである。

さすが大商人の信用がうかがえる。

捕鯨の収量は予測できず、鯨油の年々納入に不足の年も出るというので益富家は福岡藩の高額扶持には、かえって心配があり結局十人扶持に決定した。これらについては亀井家は一切関与しなかった。

やがて、益富家は捕鯨領域の拡張に迫られ、ついに長州藩領に進出捕鯨基地の設定とその構築」を考えたが、遺憾ながら同藩に有力な伝手を得られず、又左衛門は内々に亀井昭陽に打明けた。昭陽も名案はないが、同藩に唯一の手づるは長州藩の名儒とされた山県周南の後嗣で、いま長州藩明倫館々長を勤める山県太華がある。彼は若年修業時に再々亀井家に滞留、昭陽の紹介で諸藩儒の訪問をくりかえして昭陽に報告、これは両者の貴重な学会認識になった。

最近は大華との交流は、両者の境遇に変動もあり以前のようにはないが、いまの昭陽としては他に方法なく、この学者先生を使うことにした。昭陽の口上は、捕鯨業は、長州藩に大益を必ずもたらす。まず益富家は、父南冥以来の学事に始まり、現在には同家の主治医、現に娘婿の雷首が、この跡を嗣ぎ年々の家族全員診

断と平素の特効持葉を欠がさない。

子弟修学は先代以来全員が亀井留学をつづける。その詩文は毎々亀井塾講議で特優を見る。下劣な私行と遊芸は一切なく必要な席では奇抜で衆目を娯しませる洗練の芸を披露する。

商人特有の誇張的な言葉や「へつらい」追従などは全然耳にしたことがない。同家の番頭たちは、さすがに商人とされる態度、物腰は見られるが、これらにも節度がある。すべて同家代々の家風とされる。

以上は、昭陽が益富家の長州藩要路に面接を得る予備工作である。

「まあ、益富家の番頭でも当主でも会って見なさい。決して心配をかける人物ではありませんよ。」と安心させたのである。数日おいて昭陽紹介状を持参して長州藩儒で明倫館祭主の山県大華に、次で藩当役（家老のこと）に益富又左衛門が番頭を同伴で出頭、面接した。

ともかくにも、この捕鯨進出を許されないと、大変恐縮であるが、長州藩に長い大損を生じますよ。この昭陽の益富捕鯨進出を説いた書面二通は（文庫所蔵）昭陽の大胆に驚かされる。またこの文を長州藩上層に取次いだ山県太華も、さすがに先帥荻生徂徠の直門、高弟として名声

を高めた先父周南先生の後嗣である、と昭陽も感慨を深くした。

長州藩は相次ぐ藩政改革の実行も同藩の財政窮乏は解決できない。

その主因は同藩主代々が積年の宿願とする「倒幕勤皇」で、すでに全国諸藩に先魁けた運動と斗いが藩財政の高負担となっている。

これに昭陽は、捕鯨業が絶対に大利益をもたらず、と急所を突く遠慮のない説き方をしたのである。

この効果はすぐ見えた。

長州藩の内諾を得ると、益富家はすぐに五千両を一カ月おいて二回、計壹万両を献納。基地造成の内諾を得た謝金であった。こうした大金の動きは、多くの手を経て、歴史的な事実となる。壹万両の大金を日時をおかず、それこそボンと出したに等しい。要路の重臣は、もとより下僚に至るまで早い情報、気分の良い話として藩内に明るく広がったに違いない。

これで益富家の長州沖捕鯨が実現した。

長州から帰った益富家の番頭は、長州藩での要件の上首尾を昭陽に報告、ついで亀井塾補助年額を七掛増にすると、主命を伝えた。七〇％のアップである。

昭陽空石日記は、年々の会計収支を掲載して、昭陽の「会計不如意」の悲鳴も記録している。これは学塾収支の会計に限ったもので、亀井家と昭陽の全経済でないことは予測されるであろう。益富家からの亀井家贈与は、潤沢な鯨肉とその付加産品（おばいけ、干皮身など）について日記に詳記されるが、金銭については全く記録を欠く。

これは日記当人の当然な常識で、亀井家将来にも書き伝えるものではない。ただ亀陽文庫には他年の取組みでおよその推察はつく。

まず、昭陽の益富氏捕鯨・長州領進出の成功報酬は、昭陽に少なくとも式百両であろう。また本記事になった益富家からの亀井家と塾補助は、年額で従来は金拾両から長州領進出幹旋で七〇%増の拾七両であろうか。

商人の長期支給とする補助的なものは案外に少ないのである。

次に、平戸の生月島から搬入される鯨油の筑前領における農村への配布手段について説明しておこう。

鯨油の四斗樽は、普通の水のものに比べて四割かた重い。ましてや式樽を売扱としての荷扱いは倍となる。

幸いに福岡藩からの受荷指定は、いずれも遠賀郡芦屋、宗像郡津屋崎

の二津港が遠賀川の幹支流と、その堀割と農業灌漑水路を毛細管のように利用して福岡藩奥地の山丘陵まで運送を可能にし、これで筑前東北部区域を解決する。

筑前中央部は宗像の釣川を津口にして、三郡山周辺の藩納米の押出し水路（積載舟型を水路に入れ、仕切り板による水量増減によって次の水路に進入する）を利用する。また御笠川、宝満川によって太宰府、甘木

一帯の平坦地には昔から巧妙な筑後川水利の導入によって最良条件に造られており、この恩恵を受ける。

筑前平野の主流である多々良、那珂の二川によって、福岡城下と筑紫早良、粕屋一帯は宇美川を加えて便利よく片付く。また藩納米の出荷水路の仕切り手法を逆に利用することも多い。

昔は山地農村からの米出荷は殆ど水路運送であった。現在は、その水路が失われているが、明治以前はクモの巣張りの水路の堀割が上手に連結していた。

那珂、樋井、室見、瑞梅寺の四川は多くの支流が張って筑前西部を余すことなく水路化していた。水路利用が絶対に不可能の小地域は、庄屋のかけ声で鯨油受給する農家の受

益者負担で小配給化し、四百四拾九石式斗の鯨油総量が福岡藩農家に年々供給されたのである。

鯨油の藩負担と稲作効果・藩収米の増産効果について統計が見られないのが残念である。

#### 「昭陽伝稿中の偶感」

早や平成七年も暮れます。昭陽伝として昭陽の半伝記を本人日記『空石日記』を土台に書き始めました。空石日記そのものは通読すれば、昭陽もとより亀井家とその一族縁者の動きがわかり、また昭陽を調べるのに照合と的確を期される効用は大きいです。

前にも書きましたが、昭陽は弟たちや子供の死に何度も際会するのであるが、日記で見ると限り哀惜、嘆息（*天を*）を見せません。

なるほど、日記でこれらを誌すべきでないという理解もするのですが、人の死去は非情で天が宰配するものと昭陽は若い時から腹を据えていたように思います。

日記を始めて五年目の文政五年正月まで、是歳余五十、内氏四十五、友二十五、敬二十三、義也十八、鉄也十五、世也十二、宗也九、脩也六歳と自分始め家族の年令を書くのを元旦記事の恒例にしていますが、文

政六年以後ビタリと同記事を中止します。

文政九年は昭陽五十四歳です。元旦記事原文通りにすると「癸未朔風起汲井華水啓詞堂獻沫茶退而書君子萬年永錫祚胤夏戩半載落款曰丙戌第一書正月朔旦以井華水揮写昭陽鉄也亦直幅試毫來」以上を本誌の昭陽伝（十三）に訓して記事にしているので御参考を得たい。

以上の訓読は正しくしたつもりですが『空石日記』を正訓のままでは読者にお気の毒と脱線させて、昭陽や周囲の人々の活動を加える。

例えば十一日記事が「典礼與少進鶴之」の一行で終わっているのに、少進は亡き太宰府雷首の没後養子であるから同家の家業であった診療がその後順調に続いていること、学塾の継続も以前と変わらないなど補足を加えた。ほかの資料から少進の近況が得られたので補充したのである。原文通り「典礼と少進が来た。これに酒を出す」では味気ない話になる。少進は、後に昭陽の末娘「示」と結婚するのである。

昭陽には少稜ほか三女があるが、次女「敬」は勉強せず文字に素通りで、読み書き共に全く駄目であった。これらは別に一文をする。

# 能古の観月

安 陪 光 正

## 莊子と月

四月から始まった福田教授の「老子・莊子」の講義は、月に一回第二土曜に行われる。たまたま九月の講義が九月九日、重陽と中秋名月の重なる日であった。とくに先生にお願ひして、老子・莊子中にみられる月の話をして頂き、その後月見の宴を開こうということになった。

先生によれば、月という固有名詞は老子にはなく、莊子には三十八か所みられるという。それは、六月とか日月とかいった形で出るものも含めてである。

号 26 第 (5)

先ず逍遙遊篇の中に「諧の言に曰く、鵬の南冥に徒るや、水の撃すること三千里、扶揺を搏ちて上る者九萬里、去りて六月を以て息ふ者なり」の六月で、これは時間としての六か月である。鵬という大鳥が南の海に移ろうとするとき、水は三千里にわたって波立ち荒れる。鵬はそのとき起る旋風に羽ばたいて九万里も上のぼり、それから（南を指して）飛び去り、六か月の後に（南の海に着

いて）休息する。この後に、「地上から空を見あげるとき」、空の青々した色は、果たしてその本来の色なのだろうか、無限に遠いためなのだろうか、空から地上を見おろすときも同じであろう」とつづく。このように大鵬が下界を見おろしたら青いであろうという発想は、人間衛星船から地球を眺めたカガールン少佐が、「地球は青かった」と言った有名な言葉を思い出させる。地上から蒼空を仰ぎ、反対に天空から地上を見おろすといった考えが、二三〇〇年前の莊子に述べられている。

次に齊物篇の中に「然るが若き者は、雲氣に乗り、日月に騎して、四海の外に遊び、死生も己を變ふる無し」の日月である。至人（真人）のような人物は、雲に乗り、日月に跨がって、宇宙の外に出かけ、生死によって自分の心を変えることはない、というのである。日と月とをコントロールして宇宙の外に出かけるなどとは、今でこそ人工衛星を思わせるが、当時としては寄想天外、とてつ

もない考えであったらう。また大宗師篇に「日月は之を得て、終古息まず」の日月で、これは雄大な天体の運行である。日月は道を得て、永久にめぐり続ける。北斗星は、道を得て永久に乱れることがない、などともいつている。

時間の関係で、先生は他を省略されたが、二、三、私の目にとまった日と月について付け加えたい。外物篇に「慰啓沈屯利害相摩して、火を生ずること甚だ多し。衆人、和を焚く。月は因より火に勝たず」、ここに月が出る。心中がもやもやと悶え、憂いに沈みがちで、利害の念が摩擦

し合って、やがては火が甚だしく燃え出し、ために多くの者は、心中の太和の気を焼き失ってしまうのである。人の心は月のように清明であっても、この火に勝つことはできない、と。

また列禦寇篇に「莊子、將に死せんとす。弟子、厚く之を葬らんと欲す。莊子曰く、吾は天地を以て棺槨と爲し、日月を連壁と爲し、星辰を珠璣と爲し、萬物を齎送と爲す。吾が葬具、豈に備はらざんや。何を以て此に加へん」の日月がある。莊子が今にも死のうとする時、弟子たちは手厚く葬りたいと希望した。すると莊子が言った。「私はこの天地を棺槨とし、日と月とを對の飾り玉とし、星を珠玉の飾りとし、万物を私への贈り物だと考えている。私の葬式の道具はすっかりそろっている。この上に何をつけ足すことがあろう」と。これは誠に雄大な葬式用具で、日と月とを對の飾り玉と考えるのである。

能古の旅館「かもめ」にて観月の一同



## 海の月

講義が終わって、一同つれだって博物館を出た。永福寺を左に見ていたら坂を下る

## 能古博物館だより

と、右手の小松山に萩が咲き初めていた。雑木に這い登った葛の葉影に、赤紫の穂状花がのぞく。足下に散った葛の花びらから、グレーブジュースに似た香がただよう。谷を隔てた真向いの雑木山に、檀一雄が最後の二年をすごした家が屋根をのぞかせていた。それは今管理者もなく放置されているという。寺の境内に沿った道は左に曲り、こんもりと青葉を茂らせる大銀杏の下を通った。真直に海岸の道につきあたった角が、月見の宿「かもめ」だった。

海を隔てた博多の灯はまだともらず、月はあたりを照らす光もなく、まるで絵にかいたお盆のようだった。宴がすすみ、夜の闇がせまると、海に向うに博多の灯が一線にまたたき、月は光をえて海に火柱を投げた。例年のない良夜だった。

## 月の漢詩

「老子・荘子」受講生の月見には、やはり漢詩が似合わしい。月を見てみると、李白の「月下独酌」が思い出される。

杯を挙げて 明月を邀え

影に対して 三人を成す

明月に向かつて杯をあげると、月と自分と自分の影法師とで三人になる。

我歌えば 月 徘徊し

我舞えば 影 零乱す

自分が歌えば、月もさまよい、自分が踊れば、わが影もついて踊り出す。月下に独り飲む酒、人の一生は、運命の女神に導かれて踊るこんな踊りにも似ていないだろうか。

また白居易は、「八月十五日夜

禁中に独り直して月に対して元九を憶う」の中で、

三五夜中 新月の色

二千里の外 故人の心

渚宮の東面 煙波冷やかに

## 浴殿の西頭 鐘漏深し

禁中で十五夜の澄みわたる満月を望みながら、遠く江陵に左遷された君は、今どんな気持ちでいるだろうかと思ひやる。君のいる江陵の渚宮の東では、もやが冷たくたちこめているだろう。こちら浴殿の西には、時をきぎむ漏刻の音が遠く伝わってくる。この詩は月の名句としてあまりにも有名である。この渚宮は今の荊州のことらしい。私が昨年訪れた荊州城は、今に町をとりまく城壁や城門、その外濠が昔のままに残っていた。この濠の水は長江に交通するという。江の渚にあったため渚宮の名をえたのであろう。

## 月餅

本稿を執筆中、久留米の知人から中国の月餅が届いた。浙江医科大学の入学式に列席し、杭州で中秋の名月を仰がれたという。小包には水果・哈密瓜・松仁胡桃・草莓などの月餅が入っていた。中国の月餅は、日本とちがって名月の時にしか売らない。

私はかつて北京から洛陽への夜汽車の窓から、十三夜の月を仰いだことがある。北京を出た汽車は、大行山脈の東麓を南下し、保定・石家荘・邯鄲・安陽を経て黄河を渡り、洛陽に着いたのはさわやかな秋晴れの朝

であった。町中を通るとき、あちこちの店で中秋月餅を売っていた。店の中だけではなく、道にはみ出して月餅をならべ、賑やかに人だかりしていた。それにも大小があつて、太いになると径三〇センチに及ぶ。満月に型どった月餅は、月に供えて、皆で分けて食べる。家族が満月のように欠けることなく、むつみ合うようにとの願いをこめたものである。

数年前までは、福岡でも海王や広州酒家で月餅を売っていた。海王は店がなくなり、広州酒家では作らなくなったという。仕方がないので、昔から大丸で売っている中村屋の木の実月餅を求めて月の座に持参した。一同は月見の宴を終わり、先生と共に八時の渡船で能古島を発った。すでに月は中天にかかり、清光が海を静めていた。月面に見えるまだらな陰影、私たちは爽涼の気あふれる甲板に出て、月光にぬれながら帰った。

(市川安司・遠藤哲夫著、新釈漢文大系七・八、明治書院、昭和四一。武部利男注、中国詩人選集七、李白、岩波書店、昭和三一。目加田誠著、唐詩散策、時事通信社、昭和五四、を引用或いは参考にした)

## 昭陽の四女について

姉妹それぞれに

幸不幸・綾なす人生を歩む

亀陽文庫同人

亀井昭陽に女子四人あり。

幸いに四女とも成人し、それぞれに結婚するが、この四女のあらましを書いて参考に供しよう。

長女の友・少栗は、文人画と呼ばれる詩書画一体の作品に長じて世に知られるが、その才能は天分というほかはない。自ら少女期に興味を持って絵を描くことを覚えた。これに詩と書を加える文人画様式も早くから身につけたようである。書については四歳で父昭陽に仕込まれる。

九歳で黒田藩の支藩主秋月侯が主催する「太宰府雅集会」(現代の書画会)に『行書一行』を出展して藩主の感賞を得る。この出展者は百一名で相当の盛会であったとされる。当時の出展種目と出展者名の目録録が現に残っている。

秋月侯は帰館に少栗を同伴し、秋月御殿では御国夫人と一緒に出席され少栗に再び少栗出展に嘉賞の言葉を与え、侯夫人からご褒美として縮緬帯地を賜った。

(7) 第 26 号  
こうした少栗の作品に、教師或は指導をした人物は全くない。書は前

記の通り幼女期に父昭陽、また詩については七歳頃から、塾生たちに伍して聴講し、自分の詩作を提出し書生たちと同じく添削を受けた。

彼女の詩稿は、十六歳になると『笈稿』として十一歳頃と思われる詩作も採録している。

この年頃になると父昭陽が門弟の平戸藩士神村玄条を同行し東郊の須恵村に遊行するの少栗も加えられ、十一歳で大人に伍し三名で分韻詩作を行った記録が見られる。

十二歳、日田の広瀬淡窓が亀井家訪問。これに少栗は歓迎の詩を贈っており、淡窓は唱和の詩を返したところが、淡窓の記録に残されている。

これで少栗は詩書画三絶とされる文人画について十二歳で一応の会得をしていた、とされるのである。

今宿・亀井家のご協力を得て当博物館の「亀井少栗展」開催準備のため同家を再三訪問して諸資料を見出した中に、中国出版の『芥子園画伝』という中国はもとより日本でも広く使われた文人画の手引書を見つけた。これが少栗文人画の或は種本かと即断しかけたのであるが、後に少栗作品と同書の精写復刻本を見比べると『芥子園画伝』二集の蘭竹梅菊(いわゆる四君子画)に於て、全然少栗

に模写性がなく、筆勢と筆法共に少栗作に軍配が上がる出来栄えに、さすがと自信をもったのである。

さて、少栗には亀井家伝世の家業である儒医兼帯職を次の跡継ぎとするため、相当する人物を少栗が婿取りして亀井家に入籍させる宿命ができていた。要は父昭陽が儒学専門にして医術を兼ね得ないために起こったことで、かねて昭陽は父南冥に曾祖父聴因と南冥自身のことを語らると窮するほかはなかった。

そこで祖父と父は協議し、現に塾生として修業中で親族筋にも当たる三苦源吾を説得し亀井家医局に移し、医術を修得させる。次に南冥の開業を手伝い実技を経験しながら少栗との結婚が思案されたようである。夫君となる源吾、その実家三苦家と亀井家はもともと姻戚で、同家は祝福する挙式になった。なお両人共に終生田満を通したことは現に資料として立証される通りである。結婚後一女を得、その将来を待望されながら不幸にも痲症のため七歳で逝去、少栗はすぐ弟家の二男を生後一年で引取り立派な教育法で医師に仕上げ、儒医として亀井家四代を継がせ、満足の生涯六十歳でこの世を見送った。

次は、二女の敬(たかと呼ぶ)に移る。彼女は寛政十二(一八〇〇)年七月十四日、姪浜の母実家五島屋(早船家)で誕生。姉の少栗に遅れる二年五月である。姉出生も。城下唐人町の居宅と藩西学問所も共々に未曾有の大火に罹災し、姪浜の母実家に於いてであった。丸々一年おいた正月元旦、ようやく再建家に落着いた亀井家は又々火災を受け、ふたたび母実家に後戻りである。こうして昭陽一家四人は母の実家離れ家におさまった。

これで父昭陽は再々の火難に、城下町に住むことを断念し約一杆余を西によった百道松原で、しかも樋井川畔を家の東境いにした土地を得た。

昭陽一家は、二女「敬」を加え四人となって年号が変わった享和元年五月、百道松原の新築家に移った。これが亀井家の明治十一年まで昭陽から三世代の屋敷兼亀井塾(現福岡記念病院西へ15m)である。

祖父南冥と祖母、これに女中は新築の離れ屋に早く移っていた。少栗も敬も松原に春の下草が芽立つ砂浜で、のびのびと遊んだ。女中に連れられて貝掘りも覚えた。

敬は成長するにつれて活発から勝ち気になる。姉少栗に負けまいとす

## 能古博物館だより

るかのようで、しかし勉強の方は、少しもそぶりを見せなかった。一年九月後に弟（昭陽長男・後に蓬洲と号し廿一歳で死去）二年おいて次男頼母（後に家督を継ぐ賜洲）が出生する。

敬の妹は、十一歳離れて「世」と十四歳開く「宗」の二人がいるが、これは右に書いた弟二人による年離れである。

敬には、父方の亀井家よりも母方の姪浜五島屋を中心にした親類縁者の方が親しみやすかった。

亀井家には儒者で武家という堅苦しさがあり、母方は五島屋の商号そのもので海運海商航海にかける開けた強さと商利に生きる柔軟さもある。それが敬には、はやくから母の実家に引き寄せられる素地であった。まづ祖父正朔翁は五島屋の当主にした嗣子の助八に代替りした直後の寛政八年十月九日に急症で亡くし、これで行った自分の隠居家にて建てた離れ屋「甘古堂」（父の昭陽命名）でお茶を点てる楽しみも得ないまま五島屋当主に戻った。こうした苦勞が重なったためかこの祖父もわずか一年余の寛政十年五月に急逝する。

後は古くからの番頭手代がいても

大黒柱を失った痛手は大きい。

近い親類の橋本屋、座尾屋、これに紙屋という大店が見守るようにしてくれても、抜けた柱のかわりにならず、旧家の五島屋にも傾きが見え始めた。

一族寄りで跡目を出す話も具体化せず、亀井家に生まれた女子の内、早く五島屋の血筋で養女を決め、これに婿養子を取るといふ話だけは先行した。

このため、まず五島屋の名跡を嗣ぐのは「敬」とされ、彼女は十五歳で五島屋に移った。家内はキチンとできて中々家業にまでは届きかね、彼女は婿待ちと思案の日々である。

文化十三年歳末に近く、姉の挙式があった。姉が結婚する相手は前から話に聞き、塾生として見知った顔であるが、姉は十九歳、夫君となつた方は九歳の年長であり、さすがに大柄で堂々として見えた。敬もすでに十七歳、早く御主人が決まるのが待ち遠しいのである。

それよりも五島屋に思わぬ災難が起こった。敬が五島屋に移って二年目（文化十四年）五島屋の蔵一棟が全焼した。出火の原因もわからず、まだ十七歳の独り身でいる敬には大きな苦痛になったようである。敬は

気持ちのせいか体の不調が気になり、彼女は一年余り亀井家に戻った。

やがて文政二年九月、敬は姪浜の五島屋に帰った。これは多勢の縁者たちを大きく安心させた。

父昭陽は亀井家永代記録の『万歴家内年鑑』文政二年項に「九月敬也帰于姪浜」（九月敬也姪浜に帰る）と記入している。この年鑑は家の重要事項を記録するもので一カ年分をわずかに敬の八字をとどめたのは、父も関心を大きくしていたことがわかる。

同年正月から、敬のために婚礼衣装の呉服を母「いち」が買込んでいく記事もあり、敬の縁談が近いことが、これも父『空石日記』でわかる。この日記の方は記事に際限がなく自由である。

同年正月廿一日記事に妻から相談された昭陽は「敬の京呉服類は金廿両におさめるよう」と言っていることがわかる。これは現今の三、四百万円を上廻る金額であるから相当のものと考えられる。

敬の養子婿は、五島屋にも亀井家にも近い縁類の唐人町橋本屋上原太左衛門の三男で敬と同年の廿歳が決まり年末に祝言を挙げた。主人の名は五島屋当主が代々の通称にする助

次郎となった。

助次郎は、旧家五島屋の再興に一生懸命の取組みをした。これで取引が切れていたのが少しは復活の兆しも見える。二十年をこえる空白を埋めるのは商業的には新店を開くのに等しい。それでも五島屋を忘れない取引先もままある。まず魚干物の卸し、小売を手始めにした。

五島屋の本業は津湊（川尻にある船寄せ場）から川上に上下する貨物取扱業、これに海産干物類の大卸し業を兼ねていた。大量に扱うのは北海の「昆布、干物にしん、たら」類で、この荷受けは下関港の大卸しであるが、これには五島屋の信用は消失も同然、多額の保証金を敷かねばならない。いまの五島屋にはとても無理で暫く時期をおかねばと、助次郎は辛抱している。また五島屋に対する藩の指定商の権益も当然消滅している。

助次郎は店にはまりこんで新しく知る事実が多く、暫くは小商いからと覚悟していた。

それでも丁稚を一人雇い、二年目には手代を置いた。自分の出張商いが多くなつたのと、手代（善二という）にも出商いをさせるつもりである。

こうして五島屋の商況も段々と上

向き三年後には手代、丁稚を一人ずつ殖やし、それに新しく女中一人を雇った。これで店は助次郎以上五人、敬は女中を手伝わせ台所から店まわりの世話まで手ぎわよくこなした。昭陽も一度この状況を見て安心した様子であった。

敬には母の伊智に何度でも来てほしいのであるが、亀井塾も塾生総員三十九人となり従来の最高と言われ、昭陽も満悦であるが、この内の約半数が遠地からの内寮生。このため、母の伊智による裏方の下男二、女中三人でなお手不足で多忙が見られるが伊智は辛抱している。

こうした五島屋の状況に思わぬ助けが出た。生月の鯨扱ひ博多営業店の番頭支配人から、生月の総大將(豊屋又左衛門のこと)から五島屋の商い再開が見られたら、積極的に手助けせよ。鯨の卸しは、当分支払い不要、翌年決済で注文通り売れ。

これは、益富家の子弟が昭陽塾に來ているので、その情報によったものであろう。それにしても、いまの五島屋には願ってもない助け舟である。雷首が次の生月定期回診には助次郎を同伴して挨拶させようと昭陽に話した。

これに又々助けが届いた。下関の

北海物産総元から「五島屋さんの取引は、今年分は当座決済は不要、年内の注文は翌年三月に総決算や。生月の豊屋(益富家の商号)さん保証で決まりましたんや。遠慮せんと注文して、せいぜい儲けないけませんぞ」とされた按配である。

これで「鯨よろず販売。こんぶ、乾たら、にしん、すべて高い」と。鯨と北海物産の宣伝ができ、「さすが五島屋。店あげたら、すぐにでっかい商売や」と博多の前評判も上々。これに生月の博多店からは少々遠いが遠賀、鞍手の奥まわりの鯨卸しは五島屋にお願いする、と店々の取引譲渡を受けた。北海物産と塩鯨類は、こうした山地に需要が多いのである。

助次郎は、手代などの補充と教育にしっかり気持ちを使うため自身で手代の善三を連れて、彦山、宝珠山辺の奥地まで商況探査に出かけた。小倉商人との出合いが心配されるが、鯨はこちらが本元に近いので良い商品の供給ができる。北海物産は多量仕入れて格安供給できるとそれぞれに商算ができる。

すべて、五島屋代々の御先祖、これに新地の亀井家とくに昭陽父の目だため心使い、これと生月の益富家による大きな信用供与のおかげであ

ると感謝して手を合わせる。

助次郎という婿養子どのは、こうした人物である。彼の人柄は本稿で何度も紹介することになる。

敬も文句はなく、婿どの助次郎の懸命な働きに心服し、姪浜という漁村と福岡城下を離れた地域で地方的な人と物の集散する小都市に五島屋の存在は大きい。また五百石程度の小廻船ながら藩内の海岸から川口を利用して陸地深くまで物資を運び、米麦その他農産物の搬出は帰り便で運搬する。

家庭も円満で、まもなく敬は二女一男の母となる。子供たちが手を取らないようになった頃、五島屋の身代は助次郎の働きで持ち直っていた。昭陽が安心して五島屋に來ると好きな酒をゆっくり飲むようになった。これは敬に大きな喜びである。

好事魔多しというが、敬の最愛の夫、助次郎が天保四年四月死去。結婚わずか十三年であった。末っ子の長男忠次郎は、ようやく五歳である。母親になっていた敬は以前に変わって強い。廻船運航は小規模にして船頭にまかせ専ら生月の鯨類と北海物産こんぶ、にしん、たらの卸販売にしばった。さらに、廻船業は船頭の希望もあって本人に譲り渡した。

敬に二女一男、二女は裕福な商家に嫁ぎ、男子忠次郎は虚弱のため八歳で死去。すぐに敬は、かねて見込んでいた親戚の十三歳少年を引取る。

この子の敏達と健康に信頼して五島屋当主通称の助次郎を名乗らせる。

この助次郎は天保十四年二月。十四歳から日記を始める。これが、現に姪浜の早船正夫御当主から借用する「助次郎日記」である。残念ながら断切れで、最初の一年十カ月であるが、これで同日記の全容がうかがえるように思われる。

敬のことは母様と、百道の亀井昭陽妻は、新地祖母様、今宿伯母様は亀井少梁であり、亀井当主を鉄次郎様と、いずれも正しい呼び方である。日記の書始めは、藩発行の米札について、壺升札が銀壺匁(錢六十文)指値が、後に五十四文、四十四文からさらに下落、ついに廿文、十八文にという札相場を示す。ついに札通用は二月限り御引上げという藩の米札施策は大失敗の顛末まで記す。助次郎のするどい商人観察である。

家庭記事には思わずほえまされる状況もある。本稿の主人公敬は、母様として再三記事になる。

五日、母様と新地(亀井家のこと)

能古博物館だより

に行く。汐満ちて飛石上に水有り。母様の手を取り渡って行く。(昔は金屑川には橋がなかった)

橙(びび)八ツ、桃枝二枝、土産持ち八ツ半(后二時頃)帰る

・十日、天気能：略：夕に鉄次郎様今宿の帰りに御出有(以下略)と、本家の当主陽洲の消息である。

敬は、嘉永五(八五)年三月死去、享年五十三歳。実子の娘二人は親戚筋の商家嫁に、一男は早死。しかし、見込んで貰った養子助次郎で五島屋再興が見られるまで持ち直したのが、なによりご先祖へのお土産にされる、としたことであろう。

次は、昭陽三女の世(せい)。文化八(八)年七月廿二日出生。姉二人、兄も二人というつづきである。彼女については前文にしたが二兄と早世の一女を経て姉の敬とは満十年の年差がある。亀井家は男子は別にして女子にはほとんど学問、習字を指導しない。ただ少栗は別で彼女は天性で自分の分野(文人画)を自己啓発したのである。従って字を解さず自分の名前も書きたくないという反抗女も出た。世は、それほどではないが、まあ好んで読み書きを習ったという形跡は見られない。寺小屋

程度のことは自習したのであろう。

世が廿二歳になってからである。例の『亀井家萬歴家内年鑑』の天保三(一八三二)年二月廿八日の項に「允世也結婚之請」(世也結婚之請を允さる)と、藩の許可を得た記事である。即ち三女世の結婚について藩当局の許可を求めた回答である。この結婚話が何時頃進められたかは、別段の記事は皆無である。ただ廿二歳の世に喜ばしいことで、相手は藩の馬廻組士で知行百五十石、屋敷は大西一番丁。宮井家の藩経歴は古くなく、いかなれば新規取立てによる。藩体制も、この時代になると新規の召抱えなど甚だ少なく、多くは古参の家柄で二、三男が別家或いは分家として取立てられることが多く通例になっていく。宮井姓は藩内に同姓がなく、全くの新参取立てと見られる。「世」もこうした武家筋に婚姻できたことは多数の親類縁故に取巻かれるよりは楽で、これで結婚を承諾したとも思える。馬廻り百五十石は藩内では上位の武家で、格下に無足組、城内組がある。亀井家も儒者としての名は通っているが武士身分は最低の城代組、足軽よりは上位というだけである。家禄の亀井家十五人扶持に比べると、百五十石は丁度

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子 西嶋洋子 岡部六弥太 村上靖朝 星野万里子 吉村雪江 桑形シエ 田上紀子 安松勇一 上田良一 高田浩二 桑野次男 玉置貞正 木戸龍一 桑野道子 原重則 石橋七郎 藤木充子 和重 板木継生 行成静子 鬼塚義弘 吉原湖水 中畑孝信 片岡洋一 石川文之 宮本敏夫 山内重兵衛 岩下須美子 西村忠行 西川真澄 岡本金藏 都筑久馬 斎藤拓 石橋親一 古賀清子 三宅碧子 西野金子 青柳繁樹 吉村陽子 星政憲 林十九楼 安永友儀 磯崎啓子 織田臺代治 横山智一 上田博 坂田敏子 鶴田スミ子 伊藤康彦 大神敏子 塚本美和子 寺岡秀實 石橋清助 塚本和子 寺岡秀實 奥田稔 原田種美 柳山美多恵 三角健市 古野剛也 岸洋子 長八重子 隈丸清次 岸尾茂徳 井上敏枝 平河涉 葉山政志 久方正隆 吉富とき代 大山宇一 川島貞雄 半田耕典 武藤謙二 森本憲治 西尾健治 黒川松陽 久野敦子 野田洋一 神原純道 渡辺美津子 荒谷幸子 前田静子 山田博子 星野玄 首藤卓哉 佐藤泰弘 飯田晃 浜崎信也 藤野謙治 吉岡克 小川正幸 篠野清春 神戸聡 熊谷伸吾 永岡喜代太 岩谷正子 林野祥子 井手俊一郎 前原市 田代章祐 (大野城市) 伊藤泰輔 田代直輝 執行敏彦 久野敦子 渡辺千代子 坂井幸子 春日市 後藤和子 足達輔治 江川高二 筑紫野市 原山浦一郎 横溝清 川津紀子 原富子 三川治 太宰府市 中村ひろえ 佐々木謙 古賀謙二

- 西尾弘子 平岡浩 蔵田はつよ 野尻敬子 筑紫郡 結城慎也 (粕屋郡) 榎田正己 榎田猷子 松本雄一郎 青木良之助 友野隆 長崎榮市 井手加維子 (宗像市) 益尾天嶽 木村秀明 甘木市 佐野至 井上清 宮崎邦彦 富田英寿 朝倉郡 鬼丸春夫 山崎エツ子 飯塚市 小山元治 (浮羽郡) 古瀬宗雄 (大牟田市) 嶽村 魁 古賀邦靖 西山正昭 筑後市 中島栄三郎 (菊田町) 木下勲 北九州市 片桐三郎 平野陽一 市丸喜一郎 (久留米市) 庄野陽一 柳川市 榊島政信 直方市 山本利行 鋤田祥子 佐賀県 甲本達也 (大分県) 寺川泰郎 田本政宏 鳥井裕美子 長崎県 浦上健 (熊本県) 濱北哲郎 山口県 小山富夫 松井日出雄 大阪府 辻本雅史 京都府 松田清 (愛知県) 杉浦五郎 庄野健次 (神奈川郡) 中野晶子 野崎逸郎 村山吉廣 田中加代 大島節子 (千葉県) 森久 埼玉県 間所ひさ 石川県 丸橋秀雄 (宮城県) 田中信彦

協賛会員(個人)

- 片桐寛子 中村登 (福岡) 笠井徳三 菅直登 (福岡) 早船正夫 荒木靖邦 (福岡) 浄満寺 永田蘇水 (福岡) 奥村豊直 沖双葉 (福岡) 大里豊 双葉忠 (福岡) 梅田光治 安陪光正 (福岡) 七熊澄子 亀井准輔 (福岡) 熊谷雅子 富安波 (福岡) 滝栄三郎 上田満 (福岡) 小田一郎 誠次郎 (春日) 木原敬吉 飯塚 具嶋 菊乃 (甘木)

倍に当たる。乗馬資格があり、なによりも藩主に近い。この馬廻り組というのは乗馬の藩主に近く己も乗馬で藩主に近く位置する家臣団のこと

で、いかなれば旗本の士である。世がどうして此の縁を得たか詳細はわからない。宮井氏は文化年の分限帳から見られ慶応年も同様。同姓は同家だけであるのも新規立立ての家とされる。少し古くなると分家が

でき、士格も無足、城代組と本家は別に格下りする。明治維新にも同家はつづく。藩主参勤に欠かさず随行しているのが特徴に見られる。こういう係累の少ない武家に嫁入った世は恵まれており、武家親族つきあいが無いのは何よりの気楽である。

また新参家であるため藩内での縁類が少なく見込んだ。これが「世」に武家妻となる決心が出来たとも考えられる。公式身分は上位となった昭陽四女の一人である。子宝にも恵まれ、世はお産のつど里帰りしている。天保四年五月女子、同六年九月女子、同九年九月男児、同十四年男子を得るが、兄が相続して惣太郎を名乗り、この人が明治に至り、目度出である。同家は明治十五年頃、今宿に住居を移しているが以後の消息はわか

らない。

いよいよ末娘の「宗（むね）」におよぶ。宗は、文化十一（一八四）年九月四日に誕生。同年五月に祖父の南冥が没している。父昭陽は、かねて構想をこらしていた。『蒙史・六卷』（註Ⅱ古代日本史）を二年越しに著述を終え、長姉の友（少栗のこと）が、別冊筆写を仕上げている。三年後の正月、次姉の敬が天然痘に罹り、二月になって宗も発症するが、両女とも軽くすむ。一生に一度まぬかれない伝染病であるから幼いうちに早くすむのが良いとされた病気で、当時は死亡率も高かった。

明けて文政二（一八一九）年、前年九月から父が記録を始めた『空石日記』元旦の項に、父を始めに家族全員の名前と年齢を付けるのに八番目に宗也六歳と、次で弟の脩也三歳と始めて記入され、これを以後毎年くりかえされる記事になる。

以上の父日記記事は、父の死後に始めて母から見せられて知ることである。父昭陽は、天保七（一八三六）年五月十七日死去するが、その以前に手続きされていた「宗」の結婚願が五月

- 【法人協賛会員および特別協力法人】
- 九州 電力 株・大野 茂（福岡）
  - 株 新 出 光 出 光 豊（福岡）
  - 出 光 興 産 福岡 支 店・山 本 繁 弘（福岡）
  - 株 福岡 中 央 銀 行・山 本 敬 一 郎（福岡）
  - 医 療 南 川 外 科 病 院・南 川 勝 三（福岡）
  - 日 本 製 粉 株 福 岡 工 場・白 尾 嘉 弘（福岡）
  - 福岡 県 警 備 備 協 会 協 会・村 上 五 一（福岡）
  - 流 通 共 済 株・花 田 積 夫（福岡）
  - タイム 社 印 刷 株・安 部 博 満（福岡）
  - 株 笠 組 笠 忠 夫（福岡）
  - 博 多 ち ち っ わ 株 魚 嘉 松 尾 嘉 助（福岡）
  - 権 藤 税 理 事 務 所・権 藤 成 文（福岡）
  - 協 通 配 送 株 富 安 渡（福岡）
  - 大 牟 田 運 送 株 本 村 康 雄（福岡）
  - 株 三 島 設 計 事 務 所・三 島 庄 一（福岡）
  - 日 西 物 流 株 原 重 則（福岡）
  - 西 日 本 急 送 株 原 重 則（福岡）
  - 愛 宕 建 設 工 業 株 野 村 六 郎（福岡）
  - 東 洋 特 殊 機 工 株 西 尾 敏 明（福岡）
  - 西 尾 ト ラ ッ ク 運 送 株 西 尾 秀 明（福岡）
  - 南 愛 光 ビ ル サ ー ビ ス 株 野 田 和 禮（福岡）
  - 南 ク リ ー ン 開 発 株 野 田 和 禮（福岡）
  - 延 寿 産 業 株 池 田 邦 夫（福岡）
  - 九 州 三 菱 小 販 自 販 株 宮 崎 慶 一（福岡）
  - 南 安 河 内 商 店 株 安 河 内 紀 男（福岡）
  - 木 原 税 理 事 務 所 株 木 原 敬 吉（飯塚）

坂田貞治（甘木）①・大久保津智夫（嘉穂）⑤  
庄野 直彦（直方）④・原田 國雄（宗像）⑥  
森光英子（久留米）②・西喜代松（北九州市）④  
永井 功（北九州）②・花田加代子（速賀）③  
本村 康雄（三池）②・中山 重夫（唐津）④  
緒方 益男（佐賀）⑤・七熊太郎（佐世保）④  
七熊 正（佐世保）④・浦上 健（長崎）③  
田中 貞輝（愛媛）①・小堀 定泰（滋賀）②  
伊藤 茂（神戸）③・西村 俊隆（東京）⑤  
白水 義晴（東京）⑤・早船 洋美（東京）①  
翠川 文子（埼玉）①・石野智恵子（東京）④  
多々羅幸男（千葉）⑤・江崎正直（東京）①  
会員ご氏名に⑥は、会費ご継続六年目をいただいたりしす。  
(-)は多年分のまとめお払い込み、( )は増口数ご負担を示します。

協賛会（個人）年間1万円  
（法人）年間3万円  
館維持、資料収集、施設整備等の資  
金援助を受ける  
納入方法 郵便振替 0173019160970  
財団法人 能古博物館  
右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。  
お問い合わせは、お願ひご送金は振替用紙（送料加入者負担）をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

# 能古博物館の会

※新規の御加入（先号以後、平成七年十月三十一日現在）は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。  
ありがとうございます。  
友の会 年間3千円  
（館の活動、館誌購読と催事企画に参加）  
自然と文化の小天地創造

## 『関秀 亀井少栗伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少栗。しかも少栗には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。  
B5版・表紙布装美本  
限定 二、〇〇〇部  
図録全カラー50頁・本文94頁  
直売頒備 三、〇〇〇円  
（送料 三二〇円）

図書出版

初に藩許可となった。このため八月になって宗は花房氏との挙式をする。宗廿三歳である。

この花房氏は、昭陽弟の太宰府住雲来の弟子で、雲来が家業とした医療に兼ねて儒学を学び、雲来の死後「少進」を名乗り太宰府亀井家として名跡を後世に伝えた人物とされる。この妻が宗となるわけである。

ただ一説に、太宰府雲来の後嗣は太宰府出身の富田氏とするものがあり亀井家万曆家内年鑑と符合しないものがある。

同家の菩提寺は、亀井本家と同じであるが、いま菩提寺の過去帳によると太宰府雲来家に次の記録を見る。

(没年) (俗名) (統縁)

- 天保15・8・15 頼(正) 少進女子
- 弘化4・12・11 ヨリ 少進三女
- 嘉永5・1・4 松次郎 少進男子
- 〃 6・12・30 きく 少進母
- 文久2・3・16 少進 戸主
- 明治3・11・22 角平 少進次男
- 〃 18・4・22 サダ 杏山妻
- 〃 27・11・2 宗(正) 少進妻
- 昭陽末女・宗
- 享年八十一歳
- 大正2・11・26 杏山 少進後嗣
- 〃 2・5・1 孝太郎 杏山長男

以上で、宗は太宰府亀井家を嗣いだ少進と二女三男を得、うち二女と二男を亡くし、夫との縁二十六年も長いとは言えないが、幸いに後嗣の杏山を得て、八十一歳の長寿を保つ。これで亀井昭陽末娘として姉兄すべてを見送る境涯を全うしたのである。

以上で亀井昭陽の四女あらましを述べたが、いずれが幸福かは断じられない。ただ、八十一歳の長寿をまっとうした末娘の宗は、己れの血を直接引く子女五人のうち四人を亡くすが、男子「杏山」を残し得て、家が嗣がせ、また自分の生涯も見守らすことができた。母親として、これにまさるものはないであろう。

当時の人命は、保健と医学が今日ほど進んでおらず、本人の夫も子女たちまで先を急ぐように此の世を去るのである。

以上は、すべて亀井家の菩提寺・今川の浄満寺による過去帳によったのであるが、先立った者の哀れよりも、少数で生き残った者の強さを痛いほど感じ取った。

浄満寺の亀井家墓石群は県指定文化財で、とくにお寺からも大事にされているが、明治年鑑に森鷗外が訪れた事蹟もある。さて、宗について特筆しておきた

いことは、昭陽四女のうち少梨につづいて儒学を勉強し、父の著書を読み得たのは、宗である。敬と世の両女は全然書物はおろか習字にも興味を示さず、とくに敬は姉婿の雷首が何度も習字を勧めて簡単な「いろは」習字帳を送ったのに、すぐ突き返し「自分に習字は不用」と答え、雷首をあきれさせている。

宗は書、漢文ともにすぐれる。

とくに父昭陽が晩年に得た末男の脩三郎に特別な才能を見出し、これぞ「孝鳥神童」として生育を期しながら六歳で亡くした。このため昭陽は「傷逝録三卷」を著述したのであるが、その文章内容ともに世人にもうなずかせるものがあつた。

これに宗は跋文(書物の終わりに書く著者とその内容にする賛詞)を昭陽自筆の原本に書いてあるがこれとはとくに文と筆蹟ともに美事である。

宗は、十五歳で束修(師に就く時の入門科)を用意し、今宿の姉夫妻が営む学塾「好音亭」に入門二年半の塾生期間を果たした。これが、宗の漢学教養に磨きをかけたのである。

宗は、太宰府亀井家を雲来から少進さらに三男の杏山につながりを支えて明治から現代に続かせた功績者にされる。

編集後記

本号の発行は正月を越えてはなりません。師走前にお届けすべきです。初めて失敗しました。その言訳にはなりません。お許しを願って一言おわびを兼ねて申します。

小生は、去る四月廿五日、結婚半世紀になる妻を亡くしました。丁度博物館では「筑紫聖堂」の落成を控え、始めての釈菜準備を進めており、休むもできません。

私が喪中になると暫くは諸事停滞し、落成を兼ねた釈菜式の祭主役も動きません。ついに妻の葬儀を六月廿五日に延ばしましたがお蔭様で多数のご参列を得て簡素ながら厳粛な申いが出来ました。この葬儀を済ますと不肖の心境にうつろが生じ、書きごとはおろか生きた情感を失い五ヶ月余り呆然自失してました。館の出動は欠かしてませんが、ただ出ているだけです。

年末に資金ぐりやなにかとやっとな動きました。半身を失い力がありません。そのあげくの本号です。真に申訳次第もありません。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)

休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月3日

入館料 大人300円・中高生200円

交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館

〒819 福岡市西区能古522-2

☎ (092) 883-2881・2887  
FAX (092) 883-2881